第10回 6/16 「鎮守の杜コンサート ～心の環境整備を訴える～」

原田 真二（はらだ・しんじ）先生　　**ロックアーティスト兼音楽プロデューサー**

1977年、18才で「てぃーんず ぶるーす」でデビュー。11月には「キャンディ」12月には「シャドー・ボクサー」と3ヵ月連続でシングルを発売。3枚全てが同時にオリコンベスト20入りするという日本音楽史上初の快挙を成し遂げる。翌年発売されたファースト・アルバム「Feel Happy」はオリコン初の初登場1位を獲得。他のアーティストにも多くの楽曲を提供し、その数は500曲以上となる。また、東京の公立小学校2校の校歌もてがける。
2000年～、心の環境整備を訴える環境チャリティー「鎮守の杜コンサート」をスタートさせ、これまでに、伊勢神宮、明治神宮、厳島神社など全国の神社でコンサートを行い、NPO法人を設立。2004年、フランス、カンヌでの国際芸術祭で演奏。2006年、ダライラマ氏をはじめとするノーベル平和賞受賞者を招いた広島国際平和会議で演奏。2007年、元アメリカ副大統領アルゴア氏制作の環境映画『不都合な真実』の日本語版エンディングテーマを演奏。2006年～、毎年ニューヨークでの「Universal Peace Day」、「9.11」セレモニーイベントに参加。2007年9・10月、ニューヨーク国連本部にて演奏。メキシコ・カンクーンにてカーター元大統領と会見。2009年9月、メキシコ国連 軍縮会議で演奏。国連本部をはじめ欧米・フィリピンでの活動も行い「愛と平和」の大切さを音楽を通じて地球上に届ける活動を展開し続けている。

《講義概要》

ロックアーティスト兼音楽プロデューサーとして、音楽を通して様々な活動を展開する原田真二氏が、「鎮守の杜コンサート」に関する内容を中心に講義を行った。

講義では、「鎮守の杜コンサート」の開催目的の紹介などを導入に、地球平和、政治、地球環境、食糧問題などについての考えを示し、人間として生きていく上で忘れてはならない本質的な考え方を学生に強く訴えた。関連して、普段当たり前になってしまっていることをさらに広い視野で見つめ直し、身近なものから地球にまで感謝の気持ちを持つことを忘れてはならないと説いた。さらに、自ら優しさのアクションを起こせば「優しさ」が波紋のように広がっていくことや、日本人のもつ「和」の心、調和の精神の大切さなど、多くのメッセージを学生に投げかけた。

また、自身の楽曲の生演奏により、曲に込められたメッセージを学生に伝えるとともに、生の音楽の持つ力の大きさを示す講義にもなった。

《受講生の感想》

●人間の本質に迫るようなお話しでした。最近の社会は利己的な考え方が蔓延している、「優しさ」が欠けている、と。周りの人に優しい気持ちを持てれば、自分も、相手も優しくなれるという考え方、素敵だと思いましたし、同感です。自分は決して一人で生きていないということに、改めて気づかされました。先生のおっしゃった「優しさのアクション」をこれから実践していきたいです。

立命館大学・産業社会学部・1 回生

●音楽をしている方なのに、地球の環境のことや、こどもや社会のことをとても深く考えておられて、でもその根幹には音楽があって、世のすべてのことはつながっていて、人々や世代もつながっているべきものなのだと改めて思いました。

立命館大学・産業社会学部・1 回生

●人はどうしても普段の環境に慣れてしまいがちである。いかに恵まれていてもそれが当たり前になってくると人は「感謝」の気持ちを忘れてしまう。自分も周り（両親、親友、全ての人）に対して、最近きちんと「ありがとう」と言えてなかった気がする。一人一人は小さいかもしれないが、それが地域、国となっていけば多くの人を動かす『力』となると思う。

立命館大学・法学部・3 回生

●人のやさしさを、心の“ 環境 ”と表現なさっていたのがすごく印象的でした。個々の意識はとても小さなものに思えるけど、１人でも政治や環境や地球に対して無関心な人がいなくなるような社会であるべきなんだと感じました。

立命館大学・産業社会学部・3 回生

●音楽を通して、優しさだとか、原田先生の伝えたい気持ちだとかがストレートに伝わってくるような気がしました。生でライブをして下さったことで、よくそれが理解できた。特にデジタルコンテンツが主流となってきたこの時代に、本来の音楽のあるべき姿を考えさせられました。

立命館大学・産業社会学部・1 回生

●「私たちはどうやっていきているのか」この問いかけはとても大きな課題であると思いました。今の自分が生きているのは、両親・友達、私を助けてくれる人々のおかげであるとは思っていました。でも「物」や生きるための「食料」などはもともと地球の生産物であると聞いて、私はそもそもすべてを生みだしてくれている「地球」に感謝していないと気づかされました。地球という原点に戻り、地球に感謝し、地球と調和して生きていくことが大切だと感じました。

立命館大学・文学部・3 回生